第１回研究会

「人新世」時代の新・里山学の創造
―新たな「自然」概念構築と「自然との対話」方法論の確立に向けた文理融合研究―

龍谷大学経済学部・教授　里山学研究センター・副センター長
伊達　浩憲
滋賀県立琵琶湖博物館・主任学芸員　里山学研究センター・研究員
林　　竜馬
龍谷大学社会学部・准教授　里山学研究センター・研究員
椿原　敦子

森のある大学 龍谷大学里山学研究センターの第１回研究会は、2020年７月28日㈫に行った。そこでは、本研究センターの2020年度からの研究テーマである「人新世」について、「「人新世」時代の新・里山学の創造―新たな「自然」概念構築と「自然との対話」方法論の確立に向けた文理融合研究―」と題する報告が行われた。報告者及び題目は、以下の通りである。

導入（司会）:「第１回研究会開催にあたって」
　　伊達浩憲研究員（龍谷大学経済学部・教授）
第１報告：「変動する森から見つめる『人新世』」
　　林　竜馬研究員（滋賀県立琵琶湖博物館・主任学芸員）
第２報告：「自然と人間の関係をめぐる人類学の動向」
　　椿原敦子研究員（龍谷大学社会学部・准教授）

Ⅰ．第１回研究会の位置づけ

Covid-19（新型コロナウィルス）が猛威を振るい、我々は新しい生活様式が求められている。このCovid-19の発生は、昨今、持続可能な社会の構築が進言される中、改めて、我々に地球自然環境と人類の持続可能性を巡る問いかけをしており、とりわけ、人類の日常活動における自然環境への影響の重大性に関する再検討が必要なように思われる。そして、その再検討は、地質学年代としての「人新世Anthropocene」概念が提唱されているように、史的なスケールで求められている。

そこで、第１回研究会は、本研究センターの新たなプロジェクト「「人新世」時代の新・里山学の創造―新たな「自然」概念構築と「自然との対話」方法論の確立に向けた文理融合研究」との関係で、地球史的観点に立った新たな人類史の視点をめぐる議論と、自然共生型社会へ向かう国際的な学術動向・政策動向の中で学術分野としての重要性を大きく高めている文化人類学の動向についての議論を深める契機として行った。

Ⅱ．報告内容

導入として、伊達研究員は、先ず、本研究センターの新たなプロジェクトが「「人新世」の歴史認識を踏まえた「自然と人間との関係性」を問うことができる新たな科学パラダイムの構築」というところにあると述べた上で、本研究会の報告は、第１に「世紀単位の長期的な時間スケールでの分析」として、森林の過剰／過少利用の実態や里山的利用の諸概念の精査（林研究員の報告関連）、第２に「各学問分野のメタ理論的・思想史的検討」を通して、「自然を外部、環境、資源としてではなく対話の対象として捉える」として、人類学やANTに学び、人間以外の生命を含む自然と人間の関係を問い直す（椿原研究員の報告関連）という点から行われることを説明した。次に、伊達研究員は、生物多様性に関するIPBESを概説する中で、従来の生態系サービスに代わる、「自然のもたらすもの」という概念の導入と「人類学的転回」といえるような研究潮流が改めて議論されていることを指摘し、例えば、自然がもたらすマイナスのものをみていく、先住民の知識を大事にする、経済学一辺倒の還元主義的、一元論的な貨幣価値の評価を見直すといったことが我々の研究のヒントになる旨を強調した。そして、伊達研究員は、自身の専門領域である経済学の視点から日本における伐採圧力、林業生産額とGNP、工業化とエネルギー消費量などを歴史的経緯も踏まえながら論説した。

第１報告として、林研究員は、先ず、地質学の中での「人新世」について、地質学的な「人新世」は未決であることや、そもそも地質年代として採用されるかどうかまでも未決であることを指摘した上で、世界地質学連合のICS世界層序委員会のワーキング・グループの中で考えられている「人新世」の定義は、例えば、堆積物の移動、サイクルの変化にともなう気候の変化（温暖化）、海水の上昇、海洋の酸性化、大きな生物圏の影響等とされている旨を説明し、現在も議論され続けていると述べた。林研究員は、次に、森の歴史から見つめる「人新世」について、琵琶湖の固定堆積物の中にある花粉化石の分析の観点から解説した。林研究員は、花粉化石の分析というデータを駆使し、そこからその時代における森の「利用」と「実態」を読み取ることでき、また、多様な時間スケールで森の「人新世」を見つめられることを論及した。そして、林研究員は、「人新世」がもつ乖離について、自然科学（地質学）における「人新世」と人文科学における「人新世」との間には認識の差や乖離があることを強調した上で、人と自然とがはなれる「人新世」、人と自然とが近づく「人新世」、人と自然とがはなれる「人新世」（脱メデア的視点）という３つに整理し、「人新世」を考えていくためには、時間スケールだけでなく、様々な乖離を埋める議論が必要である旨を示した。

第２報告として、椿原研究員は、先ず、2000年代以降の人類学は人を扱わない人類学が中心となっていること、但し、これは、1980年代に人類学がかかえていた問題に対するブレイク・スルーとして現れたということだと述べた上で、本報告はこの観点からみていくとした。椿原研究員は、次に、各年代における人類学の動向を整理した。すなわち、それは、1980年代の人類学について、自然と文化、男性と女性、自己と他者、東洋と西洋といった二項対立を乗り越えてきたこと、（例えば、レヴィ・ストロースの自然観批判等、）1990年代の人類学について、科学と人類学、科学の人類学という人類学に足場を置いていない研究者から様々なヒントを得てきたこと、（例えば、ブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク論（ANT）、ダナ・ハラウェイのサイボーグ宣言等、）2000年代の人類学について、存在論的転回がされたこと、要するに、彼らがどう信じている、認識しているのかという頭の中の話ではなく、彼らが何をしているのかというところから、ものや自然や人間や非人間の境界から捉えようとしたこ

と、（例えば、在来知研究等、）2010年代の人類学について、ハイブリッドの民族誌という方向より人類学では実際に何を扱うことが可能なのかが探究されていること、（例えば、マリリン・ストラザーンの『部分的つながり』、アナ・チンの『マツタケ 不確実な時代を生きる術』等）であった。そして、椿原研究員は、文化と言わない文化人類学から人類を扱わない人類学へと徐々にシフトしていることを論及し、このような整理を通して人類学が持続可能社会に果たす学術的な重要性と役割があることを示した。

質疑応答では、両報告者に対して、人と自然とが離れる、近づく、どちらが人新世なのかという対比の仕方それ自体に問題があるのではないか、人類学が日本における里山的自然に寄与できることは何か等といった様々な意見が出され、参加者の間で終始、活発な議論がなされた。

〈報告者〉里山学研究センター・リサーチアシスタント
眞田　章午